

コロナ禍における老年看護技術の教育方法の検討 —対面とオンデマンドを組み合わせたハイブリッド演習の実際—

今野あかね 堀田涼子 平井佳代 吉田直美 堤千鶴子

(Akane KONNO, Ryoko HOTTA, Kayo HIRAI, Naomi YOSHIDA, Chizuko TSUTSUMI)

【要約】

《目的》2020年度秋学期の老年看護方法演習での対面とオンデマンドのハイブリッド演習に焦点をあて、演習内容、器材準備や教材作成、感染管理について振り返り、演習の報告と今後の課題、改善点を検討する。

《方法》感染管理を行いながら老年看護方法演習の15回のうち、4回で老年看護技術演習を実施した。4回のうち1回は対面演習で高齢者のフィジカルアセスメントのシミュレーションを学内で実施した。3回はオンデマンド型演習で、自宅で演習するハイブリッド型の演習方法で行った。対面演習では2名1組で看護師役と解説者役を担当し患者の反応は教員が行った。

《結果》演習終了後、2週間以内に履修者の感染の報告はなかった。感染管理に注意しながら学生に学びの場を提供できたことは有意義な取り組みであり、学生に対して教育の機会の保証を行うことができたと考える。

《結論》コロナ禍の中でも感染管理を行いながらハイブリッド演習を行い、感染者を出すことなく演習が実施できた。また感染管理を行いながら、長期的に感染症と共存する新しい教育方法を模索しつづける必要がある。さらに教員のICT活用のスキルの向上とサポートが必須である。

キーワード：老年看護学教育、演習科目、COVID-19、ICT、オンデマンド学習

I. はじめに

大学教育では授業等のオンデマンド化が開始となり、Information and Communication Technology（情報通信技術、以下ICT）の活用が急速に促進する中で、遠隔授業が構築されつつある。ICTの特徴として距離、時間を問わずして情報の相互のやり取りが可能であり、蓄積した情報を自由に加工・編集・分析・表示することが可能である¹⁾。こうしたICTの特長を効果的に活用した指導を行うことにより、文部科学省（2014）は一人一人の能力や特性に応じた学び（個別学習）、教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）などの新たな学びを推進し、学力の3要素である「基礎

的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「主体的に学習に取り組む態度の育成」を育成する効果が期待できると示した²⁾。さらに文部科学省は、2017年度末までを「教育の情報化加速期間」と設定した。こうした変革が看護基礎教育にも影響を与え、2019年に発表された看護基礎教育の検討会報告書では、情報通信技術（ICT）の発展に伴い、医療現場や教育機関でのパソコンやタブレット型端末等の活用、遠隔診療・保健指導の導入、医療機器の高度化等が進展しており、看護基礎教育においてもICTを活用するための基礎的能力を養うことが重要であることが追記された³⁾。また高等学校や大学等で、遠隔授業が取り入れられている実状を踏まえ、遠隔授業を導

こんのあかね：目白大学看護学部看護学科
ほったりょうこ：目白大学看護学部看護学科
ひらいかよ：目白大学看護学部看護学科
よしだなおみ：目白大学看護学部看護学科
つつみちづこ：目白大学看護学部看護学科

入する上での体制整備等に留意することを前提に、養成所においても遠隔授業の実施が可能であることが明示された⁴⁾。そのことにより各大学がさらにICTの活用を進めている状況であったが、2019年末からCOVID-19の感染が始まり、全世界にひろがってパンデミック⁵⁾になったことでICTの活用が一気に加速した。ICTを活用した講義、演習にとどまらず遠隔実習^{6),7)}も報告されるようになった。

2020年3月には全国の小中学校が一斉休校となり、4月7日には初めての緊急事態宣言が発令され、3密回避のためオンデマンドでの講義を余儀なくされた。2021年9月現在も第5波による緊急事態宣言⁸⁾が発令され予断を許さない状況である。パンデミックの状況下において大学では学内への立ち入り禁止となった。目白大学看護学部では2020年4月に学生のIT機器の準備から始まり5月からオンデマンド講義を開始した。2020年度秋学期はCOVID-19感染状況が収束しないためオンデマンド講義とともにコンピテンシーの達成のため技術演習のある科目は感染管理を行いながら対面での演習が可能となった。実際には、筆者らの担当する2年次生は老年看護方法演習の15回のうち1回のみの対面演習が実施できた。その他の講義・演習すべてがオンデマンドでの実施であった。感染管理に注意しながら学生に学びの場を提供できたことは有意義な取り組みであったと考える。一方で老年看護学のコンピテンシーを学生にどのように身につけさせるのかという方略について検討を重ねたが課題は大きかった。本稿では、2020年度秋学期の老年看護方法演習での対面とオンデマンドのハイブリッド演習に焦点をあて、演習内容、器材準備や教材作成、感染管理についての実際を明らかにし、演習の報告と今後の課題、改善点を検討する。

II. 用語の操作的定義

ハイブリッド演習

ハイブリッドとは一般に、異種のものを組み合わせたもの⁹⁾といわれており、本研究におけるハイブリッド演習の操作的定義は学生が大学に登校し教員と対面で行った演習とオンデマンド配信の動画での学習により学生が自宅で演習を行った、2つの演習を組み合わせた演習と定義する。

III. 老年看護学の教育方法

老年看護学は老年期の特性理解を促進するための講義と高齢者の特性を理解し実習で活用できる看護過程と実技演習を行っていた。実技演習は「3密」下のものが多く、基礎看護学で習得した原理や方法が高齢者の特徴に合わせて応用し、深化した技術を身につける内容であった。教材は、多くは実物を使用し、互いが患者、看護師役となることで学びを深める内容としていた。今年度の教材配布はグーグルクラスルームを通じて行い、演習のために自宅で使用する物品は郵送することになり、使用可能な動画や資料等が限定された。

IV. 老年看護学の概要

老年看護学教育では、老年看護学概論、老年看護方法論、老年看護方法演習、老年看護学実習の4科目から構成されている。各科目の概要は以下である。

1. 老年看護学概論（1単位）1年次秋学期

高齢者の看護を行うために高齢者の生活やそれを取りまく社会を理解する。また、高齢者の個性・多様性を理解する。さらに老年看護学の枠組みを学ぶ。

2. 老年看護方法論（2単位）2年次春学期

高齢者の老性変化によって発症しやすい健康障害・機能障害についてのアセスメントと維持向上をはかる看護を学ぶ。さらに、最期までその人らしく生きることの支援についても学びながら、高齢者の倫理的課題について学び、看護の果たす役割について検討する。また家族への支援と多職種の連携についても理解を深める。

3. 老年看護方法演習（2単位）2年秋学期

老年看護学概論、老年看護方法論で学んだ知識を踏まえ、高齢者の尊厳を守り、高齢者のもてる力をいかした看護技術を習得する。また、健康障害や老性変化が高齢者の健康や生活、価値・信念に及ぼす影響をアセスメントし、その人らしい豊かな生き方を実現するための看護を導き出すという一連の看護過程を、紙上事例を通して具体的に学ぶ。高齢者の看護における倫理的課題を論理的に分析する体験を通して、高齢者の尊厳を守るために看護職が果たす役割を探求する姿勢

を培う。

4. 老年看護学実習

老年看護学実習は、健康障害を有し、医療施設と介護保険施設で療養生活を送っている高齢者を対象とする「老年看護学実習Ⅰ（健康回復を促す看護）」と、地域で生活している高齢者を対象とする「老年看護学実習Ⅱ（療養・生活支援）」で構成されている。これらの2つの実習を通して、老性変化や健康障害を有し、医療施設と介護保険施設で療養生活を送っている高齢者とその家族等について、多角的な視点から健康や生活上の課題を捉え、その人らしい生き方や生活を見据えた看護や、高齢者を取り巻く多職種との連携協働のあり方について学ぶ。その中で、高齢者看護におけるアドボカシー、倫理的課題についても考えながら、高齢者のQuality of lifeの向上を目指した健康回復のための看護が実践できる基礎的能力を修得する。

（1）老年看護学実習Ⅰ（3単位）3年次

①老年看護学実習Ⅰ-1

老年看護学実習Ⅰ-1（入院加療している高齢者の看護）では、医療施設に入院している高齢患者と、家族を含む高齢患者にとって重要な人々の健康・生活上の課題を理解するとともに、高齢者に必要な看護を実践できる基礎的能力を修得することをねらいとしている。

②老年看護学実習Ⅰ-2

老年看護学実習Ⅰ-2（施設で生活する高齢者の看護）では、介護保険施設で生活する高齢者の特徴、施設の役割・機能、ならびに働く職種の専門性を理解するとともに、施設で生活する高齢者の看護に必要とされる知識と態度を習得することをねらいとしている。

（2）老年看護学実習Ⅱ（1単位）3年次

老年看護学実習Ⅱ（療養・生活支援）では、特に様々な場で生活する高齢者とその家族等のQuality of lifeが向上できるよう、個々の健康レベルに応じた看護を安全・安楽に提供するための基礎的能力を養うことをねらいとしている。

V. 老年看護方法演習のねらいと科目構成

老年看護方法演習の時間数は15回（1回90分）であった。高齢者のもてる力を活かした看護援助の方法を修得できる、高齢者の尊厳を守り、高齢者の意思を尊重した看護を実践することの重要性とその方法を理解できるというねらいで、高齢者の特徴をとらえた技術演習を対面とオンデマンドのハイブリッド演習で4回、認知症高齢者の気持ちを理解する演習を2回行った。また既習の知識を踏まえ、老年看護の視点での看護過程が展開できるというねらいで紙上事例の看護過程を5回行った。

高齢者の看護における倫理的課題に気づき、その背景にある要因を考えることができる、高齢者の倫理的課題についての意見の不一致や曖昧さを受け入れる柔軟性を養うことができるというねらいで4分割法を利用した倫理の演習を4回行った。

VI. ハイブリッド演習の概要

1. ハイブリッド演習の目的

演習の目的は講義で得た知識を元に高齢者を対象とする看護援助に必要な技術、姿勢を取得することと、看護技術の提供および看護の受け手の体験を通し、学生自身の看護の姿勢が高齢者に及ぼす影響や提供する看護技術の根拠について考え、高齢者の生活を援助する意義を理解できるとした。

2. ハイブリッド演習スケジュール（資料1）

大学での対面演習は3密を避けるため着替えなくても演習を行える服装で来校し、4つの教室に指示された別々のルートで入室し、8人グループで演習を実施した。学内の滞在時間は1人90分とした。高齢者のフィジカルアセスメントのシミュレーションを2名1組で実施した。

自宅でのオンデマンド演習は自作の動画を作成した。学生は①高齢者疑似体験、高齢者とのコミュニケーション・爪切り②おむつ交換・陰部洗浄③食事・口腔ケアの動画を視聴し、郵送された物品を使用し自宅で演習を行った。

(1) 感染対策を行いながらの対面演習

①演習開始前の感染管理

当日、学生には自宅を出る前にグーグルクラスルームのフォームで体温を入力してもらい、体調によって登校を迷う場合には教員が判断して登校可否の連絡をした。微熱と呼吸器症状があり判断に迷って教員が登校の可否を判断して登校しなかった学生は120名中1名だった。事前に登校のバスの時間を調べ、4つの教室に入る経路について提示し、密にならないようにした。教室に入る前には手洗いと非接触体温計による体温チェック、手指消毒を実施した。演習用の不織布のマスク、フェイスシールドを配布し、教室前で交換して教室に入った。学生が座席に座る前には座席、机ともに自分で消毒してもらった。演習中は常時マスク、フェイスシールドを着用した。換気は入り口、窓を全開にし、演習中には常時換気を行った。11月であったため事前に上着を持参するように周知した。演習で看護師役の実施者は手袋を装着し、シミュレーター、聴診器、血圧計等は交代するごとに消毒シートで消毒した。演習室の座席の配置は密にならないように前後1.5m以上の間隔をあけて横並びに座った。(図1)

②高齢者のフィジカルアセスメントのシミュレーション

指導教員1名と、学生7～8名が1グループになり事前に配信された呼吸困難を訴える高齢者事例(資料1)についてのフィジカルアセスメント(図2)を実施した。シミュレーターに対して2名1組になり看護師役の実施者と解説者になり実演した。実施者はバイタルサイン測定やフィジカルアセスメントを実演し、患者の反応は教員が答えた。解説者は実施している実技の根拠や意味について解説した。



図1 3密にならない机の配置

③解説動画の作成

学生の理解を深めるため、事後学習用の高齢者のフィジカルアセスメント解説動画を2020年4月に作成した。患者役はシミュレーターで学生役および実習指導者役は教員が行った。動画の脚本、撮影、解説の編集は教員が行った。撮影はホームビデオを使用し、編集はMovie Studio 13を使用した。

④事後課題と行動履歴

演習終了後は保健所への対応に備えて、学生に自宅に帰るまでの経路を行動履歴としてグーグルクラスルームに入力してもらった。事後課題としては解説動画を視聴し、レポートを課し、レポートはグーグルクラスルームに提出してもらった。演習終了後、2週間以内に履修者の感染の報告はなかった。

(2) 密集を避けるためのオンデマンドによる自宅での演習

①動画作成と物品の郵送

2020年4月から10月にかけて動画を作成した。高齢者役はシミュレーターを使用し、看護師役は教員が行った。動画の撮影、編集も教員が行った。演習物品教材としてオムツ1枚、スポンジブラシ1本、とろみ剤3g1本、高齢者体験用耳栓1組、高齢者体験眼鏡型紙、黄色セロファン、つけ爪、手袋1枚を事前に郵送した。演習資料はグーグルクラスルームで配信した。

②オンデマンド演習の実施

スケジュールに沿って動画をグーグルクラスルームで配信した(図3)。学生は指示された動画を視聴しながら、自宅で演習内容を実施した。演習実施後課題レポートをグーグルクラスルームに提出した。



図2 シミュレーターを使用して実践する様子



図3 グーグルクラスルームでの配信

③事後課題

演習終了後に①高齢者疑似体験、高齢者とのコミュニケーション・爪切り②おむつ交換・陰部洗浄③食事・口腔ケアそれぞれの技術に関してレポートを課した。レポートはグーグルクラスルームに提出してもらった。

VII. 考察

コロナ禍で、短期間で様々な演習方法を検討し、実施してきた。感染管理に注意しながら学生に学びの場を提供できたことは有意義な取り組みであり、学生に対して教育の機会の保証を行うことができたと考ええる。また教員としてはICTの活用方法の習得とICTの活用による教育効果を見出せる貴重な体験が蓄積できたと考える。一方で老年看護学の看護技術を学生にどのように身につけさせるのかという方略について検討を重ねたが課題は大きかった。演習の報告と今後の課題、改善点について考察する。

1. 対面演習の課題と改善点

今回の演習では限られた時間や環境の中で、実習で活用できる技術演習として「高齢者のフィジカルアセスメント」を選択した。学生は1年を通じて個人ワークが多く、他の学生がフィジカルアセスメントを実践するところを初めて見たため相互学習を行うことができた。フィジカルアセスメントの学びを深めるために有効であったと考える。小布施ら（2021）が、実習室が使用できる時間や環境が限られる中で、技術演習として学内で演習すべき内容は何か、遠隔授業に移行できる内容は何か、「新しい看護教育様式」での看護技術の演習のあり方を討議していく必要がある¹⁰⁾と論じているように、1回であっても、老年看護学実習に繋

げるために、対面で実施すべき演習内容を精選した。課題レポートを評価し全員が単位修得に至った状況から老年看護の特徴を踏まえたアセスメントの思考の深化と、相互学習の効果を狙ったことが、老年方法演習の狙いの達成に至ったのではないかと考える。

課題としては時間の制約のため2人一組で実践を行ったため看護師役を全員が体験することができなかった。今後は実践している場面を動画で撮影し共有するなどデブリーフィングの方法について検討する必要がある。また予習・授業・復習を通じて知識や技術を身に着けさせる修得サイクルの学習へ導く方略¹¹⁾が必要である。今回は繰り返し練習して技術を習得するまでには至らなかった。さらに川久保ら（2012）の老年看護学領域における演習科目では演習の最終に技術テストを行っており合格を目指して実習室で学生が自己練習する様子が報告されている¹²⁾。フィジカルアセスメントだけでなく高齢者看護に必要な項目を組み合わせ最終テストを行うことも実施可能ではないかと考えた。今後はシミュレーターを活用する場所を提供する準備としてシミュレーターと人員の確保が必要である。さらに、これらの教育成果について質的、定量的に測定し、客観的に評価していくことが重要である。

2. オンデマンドによる自宅での演習の課題と改善点

オンデマンドによる演習は繰り返し動画を視聴でき、気になるところは止めてメモをできる利点がある。村上（2020）は看護基礎教育におけるICT活用と効果について文献検討を行い、動画視聴を行う実践事例が多く学習の意識を高める効果があることを報告している¹³⁾。田口ら（2021）は教員の授業アンケート結果から動画でのオンデマンド講義に関して「必要に応じて繰り返し学べる」「好きなペースで学べる」といった動画を配信するオンデマンド型授業のメリットを感じられたことが大きかったのではないかと示唆している。また物品を郵送したことで、学内で予定していた演習項目を自宅で体験することができた。実際の物品を使用し、自分のペースで演習を行えたことは教育効果を高めるうえで有効な手段であったと考える。

しかし、自宅での演習は患者役の体験ができなかった。堀之内ら（2016）は学生間で実施した口腔ケアの演習の成果について介助される高齢者の立場を実感し、そのことがケアを行う看護師の知識や技術、さらには態度のあり方などへの学びへとつながっていた。

また、模擬痰の使用により高齢者の口腔内の状態を模擬体験することが高齢者の目線での学びにつながった¹⁵⁾と報告しており、高齢者役を体験することは看護技術の修得に重要であると考えられる。しかし、口腔ケアは感染リスクが高い援助であり、今後も学生同士で患者役を行うことに制約が生じると考えられる。実際の高齢者に近いシミュレーターモデルの開発が待たれる。

今回実施したハイブリッド型演習は学生が対面授業時に、他の学生はオンデマンドで授業を受けているという授業内容が異なる分散型であった。田口（2020）は分散型ではコースデザインが複雑になる事を課題として指摘している¹⁶⁾が、表1にあるスケジュール表を学生に事前配布し、学生自身がどのコースに参加するのかわかりやすく表示したため大きな混乱は無く、実施することができた。しかし、コロナ禍においては遠隔授業・対面授業のどちらも質の高い授業が求められており、遠隔授業と対面授業の組み合わせでいかに教育効果を上げていくかが課題となっている。遠隔授業において学生の受講場所は早い段階から検討され、通学した学生が遠隔授業を大学内でも受講できる体制は整えられていった。しかし、「密を避けながら」の対面授業で学生のアウトプットに使用する教材に関しては、個々の教員が行う授業の構成に影響を受け、大学にある資源には限りがあることなどから実施における制約は大きいと感じられた。今後はより多くの学生が一度に患者・看護師役を体験できるVRの導入や学生自らが高齢患者を想定して発信し学び合いを深めるピアレビューの工夫などの検討が必要と思われた。

3. 感染対策の課題と改善点

COVID-19の感染対策については、いまだ感染経路が明確でない状況であるが、演習終了後、2週間以内に履修者の感染の報告はなかったため、看護大学ならではの適切な感染管理が行えたと考える。繰り返す感染状況により厚生労働省から「新しい生活様式が提案され」ている¹⁷⁾。看護基礎教育においてもCOVID-19だけにとどまらず、長期的に感染症と共存する新しい教育方法を前提にすることが求められていると考える。どのようにしたら演習時に感染をおこさずに実践できるかという経験になった。今後はフィジカルアセスメントだけでなく口腔ケアやオムツ交換の技術においても学内で実践できるように環境を整えていく必要

がある。

4. 教員のICT活用のスキル

今回の演習では動画の作成は教員が行った。演習の目標にあった動画を探しても見つからなかったため苦肉の策であった。学生には見慣れた教員が実施していることは好評であったが、内容については洗練していく必要がある。しかしながら通常業務と遠隔実習を行いながらの動画作成は苦難であった。遠山（2020）によると年齢が上がるほどPCのアプリケーション利用等の学習意欲が乏しくなる¹⁸⁾ことが報告されている。どの年齢の教員であってもICT活用のスキルを向上できるように教員のサポートを継続していく必要があると考える。今後は新たなシステムやWEB教材が発売され活用できるものがあることを期待する。

VIII. 結論

1. コロナ禍の中でも感染管理をおこないながらハイブリッド演習を行い、感染者を出すことなく演習が実施できた。
2. 感染管理を行いながら、長期的に感染症と共存する新しい教育方法を模索しつづける必要がある。
3. 教員のICT活用のスキルの向上とサポートが必須である。

【文献】

- 1) 文部科学省：平成30年度以降の学校におけるICT環境の整備方針について。 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/04/08/1069516_03_1.pdf（2017）（2021-09-24閲覧）
- 2) 文部科学省：学びのイノベーション事業実証研究報告書。 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/04/11/1346505_04.pdf（2014）（2021-09-24閲覧）
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書。 <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（2019）（2021-09-24閲覧）
- 4) 文部科学省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施等の対応について。 <https://www.mhlw.go.jp/content/000636112.pdf>（2019）（2021-09-24閲覧）
- 5) World Health Organization. Coronavirus disease (COVID-19) pandemic. <https://www.who.int/>

- emergencies/diseases/novel-coronavirus- (2019)
(2021-09-24閲覧)
- 6) 岡田麻里, 片山陽子, 諏訪亜希子: 対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価—COVID-19感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために. 香川県立保健医療大学雑誌, 12, 57-65 (2021)
- 7) 田畑真, 清水律, 竹村和誠, 小松美砂: 新型コロナウイルス感染症により老年看護学実習を学内実習とした取り組みと学生アンケートからの考察. 三重県立看護大学紀要特別号, 72-80 (2020)
- 8) 内閣官房: 新型コロナウイルス感染対策. <https://corona.go.jp/emergency/> (2020) (2021-09-24閲覧)
- 9) 新村出: 広辞苑第7版. 2316, 岩波書店 (2018)
- 10) 小布施未桂, 縄秀志, 鈴木彩加, 加藤木真史, 樋勝彩子, 猪飼やす子, 田中加苗, 三浦友理子, 亀田典宏: COVID-19のパンデミックにおける統合科目(基礎看護学)の取り組み: 遠隔授業での実践. 聖路加国際大学紀要7, 171-176 (2021)
- 11) 市川真一: 教えて考えさせる授業. 図書文化, 東京, p 11-13 (2009)
- 12) 川久保悦子, 井本由希子, 伊藤まゆみ: 看護基礎教育における教授方法—老年看護学領域における演習科目の授業展開. 群馬パース大学紀要14号別刷り, 21-22 (2012)
- 13) 村上天介: 看護基礎教育におけるICT活用と効果に関する文献検討. 日本伝統医療看護連携学会誌1, 1, p 72-81 (2020)
- 14) 田口真菜: 授業のハイブリッド化とは何か, 概念整理とポストコロナにおける課題の検討. 京都大学高等教育研究26, 65-74 (2020)
- 15) 城之内若名, 高田大輔, 泉キヨ子, 荒木美千代, 山田正巳: 高齢者への接触・嚥下演習を取り入れた口腔ケア演習の学習効果. 帝京科学大学紀要12, 181-188 (2016)
- 16) 田口真奈, 鈴木健雄, 名古屋大学高等教育研究文献: オンデマンド授業・ハイブリッド型授業の質保証に向けて—京都大学の授業支援を事例に—. 名古屋高等教育研究21, 49-75 (2020)
- 17) 厚生労働省: 新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を公表しました. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html (2020) (2021-09-24閲覧)
- 18) 遠山紗矢香, 古川亮子: 看護教育機関における情報教育の設計に活かすための看護教員のICT使用経験と学習意欲の調査. 日本教育工学論文誌44, 133-136 (2020)

(2021年10月1日受付、2021年11月23日受理)

資料2 呼吸困難を訴える高齢者の事例

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
12日 1限 9:00～ 10:30	大学での演習 1. 高齢者のフィジカル アセスメント	2. 高齢者疑似体験、高 齢者の日常生活援助 ※移動中の場合は12～ 15日の間に受講する	3. 高齢者の日常生活援 助（排泄）	3. 高齢者の日常生活援 助（排泄）
出席確認	演習室で欠確認	事前・事後課題の提出 で確認	クラスルームのフォー ムで確認（開始・終了時）	クラスルームのフォー ムで確認（開始・終了時）
事前課題	11月11日（水）12：30×切り			
事後課題	12月14日（月）12：30×切り			
12日 2限 10:40～ 12:10	2. 高齢者疑似体験、高 齢者の日常生活援助 ※移動中の場合は12～ 15日の間に受講する	大学での演習 1. 高齢者のフィジカル アセスメント	4. 高齢者の日常生活援 助（食事・口腔ケア）	4. 高齢者の日常生活援 助（食事・口腔ケア）
出席確認	事前・事後課題の提出 で確認	演習室で欠確認	クラスルームのフォー ムで確認（終了時）	クラスルームのフォー ムで確認（終了時）
事前課題	11月11日（水）12：30×切り			
事後課題	12月14日（月）12：30×切り			
19日 1限 9:00～ 10:30	3. 高齢者の日常生活援 助（排泄）	3. 高齢者の日常生活援 助（排泄）	大学での演習 1. 高齢者のフィジカル アセスメント	2. 高齢者疑似体験、高 齢者の日常生活援助 ※移動中の場合は19～ 22日の間に受講する
出席確認	クラスルームのフォー ムで確認（開始・終了 時）	クラスルームのフォー ムで確認（開始・終了 時）	演習室で欠確認	事前・事後課題の提出で 確認
事前課題	11月11日（水）12：30×切り			
事後課題	12月14日（月）12：30×切り			
19日 2限 10:40～ 12:10	4. 高齢者の日常生活援 助（食事・口腔ケア）	4. 高齢者の日常生活援 助（食事・口腔ケア）	2. 高齢者疑似体験、高 齢者の日常生活援助 ※移動中の場合は19～ 22日の間に受講する	大学での演習 1. 高齢者のフィジカル アセスメント
出席確認	クラスルームのフォー ムで確認（終了時）	クラスルームのフォー ムで確認（終了時）	事前・事後課題の提出で 確認	演習室で欠確認
事前課題	11月11日（水）12：30×切り			
事後課題	12月14日（月）12：30×切り			

呼吸困難を訴える高齢者の事例

目標

1. 高齢者の特徴を踏まえたフィジカルアセスメントの根拠と意味を理解できる。
2. アセスメント内容を実習指導者に的確に報告する方法を学ぶことができる。
3. アセスメントに応じ、リスクを予測した、安全・安楽な援助の方法を学ぶことができる。

背景・事例紹介

患者さんは85歳の女性、名前は磯野ふねさんです。1週間前に誤嚥性肺炎で入院となりました。入院後、抗生剤と水分・電解質補充のための点滴投与をしています。

3日前より、受け持たせていただき、以下の情報を収集しました。

〈普段のバイタルサイン〉

体温 36.3°C、心拍数 70 回/分（リズム不整あり）、呼吸数 15 回/分、
血圧 110/60mmHg（臥位）、102/60mmHg（座位）、SpO₂96%（Room Air）、
排尿回数は3回/日、排便は3日間出ていません。

〈治療内容〉

ソルデム 3A 500ml/12 時間（8時～20時）

スルバシリン 1.5g × 2 回（10 時・20 時）

〈血液データ〉

RBC340 万/μL、WBC6400 / μL、Hb10.5g/dl、Alb3.4 g/dL、BUN18.8 mg/ml、
Na138 mEq/L、K4.0 mEq/L、BNP33.0 pg/ml

本日は実習3日目で、バイタルサインの測定や呼吸音の聴取は一人で実施して良いと言われています。朝、実習指導者に行動計画を発表した際、「磯野さん、少し息苦しさを訴えているという申し送りがあったから、一緒に挨拶と検温に行こう」と言われました。検温に必要な物品を準備し、今から（9 時）実習指導者とともに訪室します。この患者さんの状態を確認し、実習指導者への報告と対応をしてください。

Methods of teaching geriatric nursing skills during the COVID-19 pandemic: the realities in the practice of hybrid face-to-face and on-demand seminars

Akane KONNO, Ryoko HOTTA, Kayo HIRAI,
Naomi YOSHIDA, Chizuko TSUTSUMI

[Abstract]

Objective: This study aimed to review seminar content, equipment preparation, teaching material creation, and infection control measures, with a focus on hybrid face-to-face and on-demand seminars on geriatric nursing methods, in the 2020 fall semester and examine seminar reports, future challenges, and points for improvement.

Methods: Of the 15 class periods four seminars on geriatric nursing methods, four class periods were spent on seminars for geriatric nursing skills while implementing infection control measures. One of the four class periods involved a simulation of a physical assessment of an elderly person in an on-campus face-to-face seminar. The remaining three class periods involved a hybrid seminar method where on-demand seminars were accessed at home. In the face-to-face seminars, students formed pairs in which one student played the role of a nurse and the other played the role of a commentator while the teacher simulated the patient's reactions.

Results: There were no reports of infection among the students within two weeks of completing the seminars. Being able to provide students with a learning opportunity while devoting attention to infection control is a meaningful endeavor that we believe also ensured students' continuous access to education.

Conclusions: Even In the midst of the COVID-19 pandemic, we held a hybrid seminar with infection control measures. We were able to implement the seminar curriculum with nobody being infected. In order to coexist with infectious diseases in the long term while conducting infection control, we need to continue exploring new educational methods. It is also necessary to improve and support the ICT utilization skills of teachers.

Keywords: Geriatric nursing education, Seminar curriculum, COVID-19, ICT, On-demand learning

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University